

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

成田悠輔 研究者

Yusuke Narita / Researcher



CREATOR INTERVIEW ^{No} 143

成田悠輔 Yusuke Narita

夜はアメリカでイェール大学助教授、昼は日本で半熟仮想株式会社代表。専門は、データ・アルゴリズム・ポエムを使ったビジネスと公共政策の想像とデザイン。ウェブビジネスから教育・医療政策まで幅広い社会課題解決に取り組み、多くの企業や自治体と共同研究・事業を行う。混沌を求めて、報道・討論・バラエティ・お笑いなど様々なテレビ・YouTube番組の企画や出演にも関わる。著書に『22世紀の民主主義: 選挙はアルゴリズムになり、政治家はネコになる』など。東京大学卒業、マサチューセッツ工科大学(MIT)にてPh.D.取得。一橋大学客員准教授、スタンフォード大学客員助教授、東京大学招聘研究員、独立行政法人経済産業研究所客員研究員などを兼歴任。内閣総理大臣賞・オープンイノベーション大賞・MITテクノロジーレビュー Innovators under 35・KDDI Foundation Award貢献賞など受賞。



何をしているかよく分からない人がやってくる余白を。

published_2023.01.11 / photo_tada / text_akiko miyaura

データやアルゴリズムなどを使って Web ビジネスから教育・医療政策まで幅広い社会課題解決に取り組み、多くの企業や自治体と共同研究・事業を行っている成田悠輔さん。そのユニークな洞察力で論客、タレントとしても活躍されています。文学や映画、アートにも造詣が深く、今回はそういったクリエイションに対する考えやアートの未来、街が面白くなるために必要なものなど、成田さんならではの視点から語っていただきました。

科学や数学は、“クリエイティブだと思われていないクリエイティブ”。

私が普段向き合っている研究では、数式やプログラムなどを使って表現する科学っぽいことをしています。科学や数学、プログラムは“世のなかでは、クリエイティブだとは思われていないクリエイティブ”なのだろうと思います。

例えば、数学者が何をしているのか、人類の99.99%の人は興味がなくて、理解もしていない。その世界にはユーザー、リスナーといわれる人はほぼいなくて、当事者同士で鑑賞し合っ、新しい発見に価値があるかを品評し合うということをずっとしている。超々マイノリティの間だけで流通する、特殊なクリエイション活動が数学であったり、科学であったりするんじゃないでしょうか。

1,000年くらい歴史を遡ると、アーティストといわれる存在と、サイエンティストといわれる存在とは、ほとんど渾然一体でしたよね。レオナルド・ダ・ヴィンチのような人は、よく“万能の天才”なんて言われるじゃないですか。でも、彼らが特殊な人だったというよりは、当時はそういう世界だったんだと思うんです。いろいろなものが、もっと原始的で単純だった。「この世界はどうなっているんだろう」と考えながら鳥を仔細に観察して手元でスケッチしたり、それをいじって改変した姿を想像したりすることが科学であり、同時にアートでもあった。

その頃は、アーティストやクリエイターといった職業の区分が曖昧で、創造したものを伝えるメディアやマーケットも未発達。たまたま知り合った人と雑談をしながらお土産と引き換えに似顔絵を描くとか、子どもがお絵かきをするみたいに半分暇つぶしでサッと手を動かすみたいなことが、アートと言われるものの原型だったのだろうな、と。それを現在の世界でも取り戻せるのか、“闘うプロ”より“逃げ続ける素人”みたいな存在をどうつくれるのか。そういう問題に興味があります。

“クリエイティブなクリエイション”は可能だろうか。

そもそも私自身が、ただただ受け身で闘うよりは逃げているんです（笑）。何の創造も発信もしてないです。人に何か聞かれたら、その場で思いついたグダグダなことを言ってみる。ブツブツ独り言を言ったり、誰かとおしゃべりしたり。特に何の価値もない時間の浪費っていう感じがしますね。きっと、人前に出ている人のなかで、ここまで伝えたいこと、やりたいことがないのもめずらしいんじゃないかな。

最近ミュージシャンの方々と話すことがちよくちよくあるんですが、彼らなんて創造と闘いの極地じゃないですか。作詞・作曲からメイク、スタイル、照明、音響、振付とつくり込んで、数千人、数万人を集めて数時間のお祭りに入魂する。天地創造っていう感じじゃないですか。かたやこっちは準備ゼロで寝起きにノーメイク。その場で思ったことを自室からテレビで喋ったりしてますからね。スタッフもチームも無。我ながら生きてて恥ずかしくないのかと思いますよ（笑）。

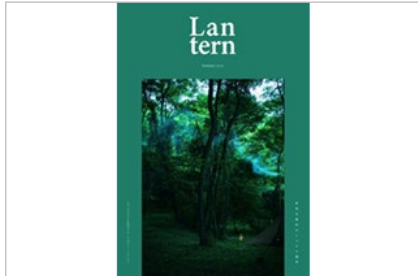
つくるべきものをつくって伝えるべきものを伝えるクリエイションはかけがえのないものですが、一方で逆のクリエイションもあるのではないかという興味も湧いてきます。本人は積極的に創造しているつもりはないのに、副産物として生まれたものがクリエイションに見えてしまう。存在自体がアート、生きてるだけでクリエイションみたいな存在にどうしたらなれるか。“クリエイティブなクリエイション”は可能かという問題です。

内容ではなく、伝え方の実験としてのポエム。

私はときどきポエムを書くんですが、それは創造的な行為というより、ある種のアジテーションや演説と同じだと捉えています。それとは別に科学や数学を通して表現する行為があるという、ざっくりとふたつの方向性が共存している感覚なんです。

数式やプログラムで表現したものが人にどう伝わっていくかを考えると、その中身よりも、どう表現されるかの方が影響力が大きいなと感じていて。その伝え方の実験が、私がポエムと呼んでいるものの中身かなと、最近思っているところです。要は実体より媒体、WhatよりHow、みたいなことですよ。情報そのものが新しいか独自かということよりも、どういう口調や声色で、どんな表情で伝えるか、どういう表現を使うか、という伝え方に注目しています。

去年の夏、『Lantern』というフリーペーパーにポエムを書いたのですが、それを紙で3,000部だけ、全国各地の場所に配るという謎のプロジェクトがあったんです。結局メルカリで5,000円だか1万円だかで転売されてましたが（笑）。唯一無二とされるアートでもなければ、複製して薄利多売ができる商品でもない。一見すると中途半端な「アートと商品の中間地点」に形を与え、名を与える試みはもっとやられていいんじゃないかと思います。

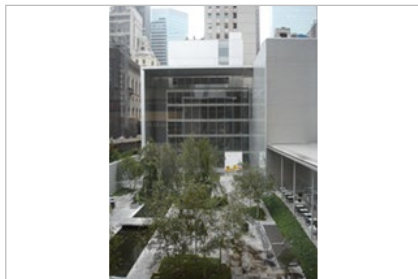


Lantern

長野県佐久市観光協会が発行している、キャンプをテーマとしたフリーマガジン。2号（通巻3号）では、焚き火にまつわる成田さんのポエムが掲載されている。全国105箇所に、3,000部限定で配布された。

アートは、唯一無二だという幻想を生かしている。

アートって、一見無駄にも思えるものを、異様に儲かる洗練された金融商品みたいなものに替えることに成功した領域ですよね。六本木のご真んなかの施設や、マンハッタンのご真んなかのギャラリーを、謎の置物とか板が陣取ってるってよく考えると不思議じゃないですか。アートは“唯一無二だという幻想”を活用したことが勝因なんでしょうね。複製可能で薄利多売の商品として成功したマンガなどの出版と、複製不可能で唯一無二のアート、そのふたつの中間にあるハイブランド・ファッション。その3つの構造を分析する経済学はつくれないかなとか酔ってるときに考えることがあります。



MoMA

マンハッタンに位置する近現代美術専門の美術館。1939年に現在の敷地であるミッドタウン（西53丁目11番）に移転。2004年、谷口吉生氏の設計により大規模なリニューアルを果たし、現在に至る。

一方で、書なんかもアートの部類に入るけれど、文字ってアートになりづらい側面があるように感じます。恐らく文字にした瞬間、そこに表わされているものが情報・意味に還元されて、「コピーできる情報に過ぎない文字に、とてつもない値段がつくのはおかしい」という人間の直観が働いてしまうんでしょうね。要は“複製できちゃう世界”になってしまっている。

成田悠輔 研究者

YUSUKE NARITA / Researcher



published_2023.01.11 / photo_tada / text_akiko miyaura

ごく普通の人を描くのが一番難しい。

私が文学や映画の世界に惹かれるのは、アートとはちょっと違う文脈なんです。そこに登場する人物って、有名でもなければ特別でもない、ごく普通の人。無名の人を描いて鮮烈なものを見つけ出すってすごいことだと思うんです。テレビや YouTube だと、ちょっと変わった人や出来事をもってこない、コンテンツとして成立しづらいじゃないですか。文学って、それとは真逆の世界ですよ。

もっと言えば、普通の人にとっては何の得になるのか、何の役に立っているのか分からないもの。だから、年を重ねると小説を読むことが少なくなる。でもその無駄さというか、非効率さ、不合理さって裏を返せば、文学や映画が一番難しいタイプの創作であるという証明でもあって、そこに面白さを見出しているのかもしれない。

創造の価値を生むのは、対となる批評。

アートや文学、ファッション、グルメ そういう創造が担う役割は、簡単には自動化できないんじゃないかと思います。漠然と人々の頭の片隅にあった問題を正面に持ってくるとか、心の奥底にうごめいていた今までと違う価値観や物の見方を目に見える形にするっていうのが、アーティストの役割だとすると、人間ではないものが果たすには多くの課題があります。

アメリカのアート史を見ると、すごぐ力を持ったアーティストが生まれた時代って、同時に対となる批評家・評論家が存在していますよね。ファッションであれば、デザイナーやブランドが存在している一方でパリコレが存在し、グルメなら料理人と同時にミシュランが存在する。つまり、創造する側と批評する側が対にならないと、機能しないものだと思うんです。

つくり出されたものがいかなる問題を提起しているのか、どういう意味で価値があるのかという文脈を与えたり、権威を与えたりする広い意味での批評の機能が、必要不可欠。そう考えると、現状すごぐ注目されている画像生成 AI のような存在は、生成側としては機能していても、批評側を担うのは難しい。自動化を実現するためには、創造側と批評側の対話はもちろん、論争、誹謗中傷といったものまで総合的に汲み取って、どうやればプログラムやソフトウェア、アルゴリズムで表現できるのかという課題を乗り越えないといけない。そこに行き着くまでには、まだまだ長い時間が必要だと思います。



画像生成AI

人が描いた絵と同等の品質を保持して、作品を生成するソフトウェア。「Midjourney」等。アイデアなどを文章として入力することでAIアートを作成する方法や、写真をアーティストが描いたような画風に変換する方法などがある。オークションで画像生成AIによる作品が高額で落札されるなど、ここ数年で大きな話題になっている。

どんなオシャレ街も裏にはゲテモノを隠し持っている。

今回撮影した「アダムアンドイブ」もそうですが、昔は用事がなくても六本木に来て、ぼーっと過ごすことがよくありました。1人で長時間居座っても何も言われず、店員さんも放置してくれる店があったんですよね。当時は朝まで営業していた「魚洋水産」とか「六本木 蔦屋書店」にふらっと来て、仕事しながら何か飲み食いしたり、本や画集を眺めたり。



アダムアンドイブ

西麻布の閑静なエリアにあるスパ施設。男性専用のアダムと、女性専用のイブに分かれており、24時間年中無休で営業している。サウナはもちろん、アカスリやマッサージ、岩盤浴など充実したサービスで、現在のサウナブーム以前から、著名人や芸能人をはじめ多くの人に愛されてきた老舗。

普段は生活が昼夜逆転しているので、夜中に活動することが多いんですけど、1人で半分仕事半分散歩で朝までいられる場所がある街って意外と少ないんです。この界限だと、六本木が新宿くらい。六本木は貴重な場所でしたし、愛着もあります。まあ私みたいな人が多いから、最近は深夜営業が少なくなったのかもしれないですけどね（笑）。

成田悠輔 研究者

YUSUKE NARITA / Researcher



published_2023.01.11 / photo_tada / text_akiko miyaura

街って六本木みたいにわかりやすい特徴がなくても、何かしら面白い要素を持っている気がするんです。私がアメリカで住んでいるのは田舎の大学街で、大して店もなく、観光名所があるわけでも高層ビルがあるわけでもない。普通に考えれば面白みのない街です。でもある日、夜中に散歩をしていたら、地下に繋がる洞穴みたいなものを見つけて。気になって侵入してみると、巨大なトンネル網のように地下道が張り巡らされた不思議な空間がダウンタウンの地下に広がっていたんです。最近知ったのですが、禁酒法時代に脱法バーのようなものが各地の地下でひっそり営業していたそうで、その名残りみたいです。きっと、すべての街が探せばそういう面白要素を持っているんじゃないかな。

その時間にいる必要のない人がやってくる場所が面白い。

日本で住んでいるのも何の変哲もない中産階級の住宅街ですけど、昼間に歩くと違った世界が見えてきます。昼って、働いている人や学生は住宅街に留まっていないし、子育て世帯は意外と家のなかにいる。結果、何をしているかよく分からない人が出没するんです。この間も道端に座っていたら、全身を緑の蛍光色で包んだおじいちゃんが歩いてきて。その先を見ると、全身ピンクの蛍光色のおばあちゃんが待っていて、おじいちゃんがおばあちゃんに何か袋を手渡し、無言で去っていったんですね。「やばい想像を掻き立てられる光景だな」と見ていましたが、どんなに退屈そうな街でも、場所や時間によってそういう奇跡的な光景が広がっているんじゃないかな。

“その時間にいる理由がない”人が集まるスポットをつくり出すことが、街を面白くする面もあるでしょうね。夜に住宅街にいるとか、昼にオフィス街にいるっていうのは、社会的な理由があるので奇跡的な光景が生まれにくい。でも、真っ昼間の住宅街のように、“なぜ、今ここにいるの?”というシーンをつくり出すと、面白い出来事や光景がどんどん出てきそうです。

予期せぬ過ごし方、使い方ができる遊びをつくる。

六本木みたいな街の難しさは、放っておくと四六時中、そこに理由が生まれてしまうこと。それでも、そういった場所で、異質な存在を街に取り込む分かりやすい方法は、予期せぬ人を動員することかも。「クリエイティブになるためのイベントを、東京ミッドタウンでやります!」と言っても、そこに来るのは自分の現状が面白くないゆえに、面白いことを考えたいと思っている凡人、という構図になりがちです。

そうならないためには、今と違った時間の過ごし方や場所の使い方ができる“遊び”をどうつくり出すか。ただ、六本木は地価が高すぎて一定の階層以外の人にはテナントになれないのが現実。ふらっと来ることのできない空気が少なからずあります。そんななか、道に畳を敷きまくって野宿できる道端キャンプ場をやって、その横に所場代のかからない24時間営業屋台エリアでもつくれば、昔の私のようになんとなく居着くだけの怪しい貧乏人が増えるかもしれない。そういう余白を、街全体でつくるのが大事だなと思います。

人の頭のなかにある脳内イメージを、六本木に実装する。

そういえば、昔、ある宗教団体がアメリカの田舎街を乗っ取った事件があるんです。彼らは突然、街に押しかけて土地を開墾し、住処をつくり始めた。さらに野望は大きく、街の行政を乗っ取るうとしたんです。そのときにやったのが全米の街に無料の送迎バスを出し、「自分たちの街に移住したら、クーポンをあげる」と誘って、全国津々浦々のホームレスたちを集結させること。結果、有権者の過半数を握って街を占拠してしまいました。それとは趣旨が違いますけど、同じ方法を採用したらどうなるかは興味があります。ランダムに選んだちょっと遠い都市から、六本木のど真んかに来られるバスを提供すれば、面白い文化の融合が起こりそうな気がしますよ。



ラジニーシ事件

インドを追われた瞑想指導者、バグワン・シュリ・ラジニーシが、1981年にアメリカ・オレゴン州の田舎町に「ラジニーシプーラム」という宗教コミュニティをつくり、更地を開拓してユートピアともいえるひとつの街をつくった。ドキュメンタリー映像『ワイルド・ワイルド・カンントリー』や、バグワンの著書などから、当時を知ることができる。



成田悠輔 研究者

YUSUKE NARITA / Researcher

published_2023.01.11 / photo_tada / text_akiko miyaura

あと、ちょっと違った視点で、“街をデザインする”と考えると、人の頭のなかにある主観的イメージを実際に再現するのもいいかもしれないですね。都市や街って、リアルと並行するかたちで、人々の頭のなかに特定のイメージが存在すると思うんです。例えば、人を集めて六本木の街はどういう形をしているか、どこに何があるかと聞き出すと、主観的イメージが浮かび上がる。実際の街とは大きくズレるであろうそれらをデータとして抽出し、脳内イメージ通りの街をつくってみると変なものが生まれるんじゃないかな。このエリアはこの人の脳内イメージ、ここから次の道までは別の人の脳内イメージと、切り貼りしても面白そうだなと思います。

少し範囲を狭めて、六本木ヒルズや東京ミッドタウンの脳内イメージでエリアをつくることもできますよね。建物や道の構造を聞いていくと、人それぞれに何があるか分からない謎の空間が存在しているはずで。例えば、「東京ミッドタウン・レジデンシズ」（住宅棟）を知らない人は、その欠損している部分を何とか想像で埋めると思うんです。埋めた部分にこそ、人が東京ミッドタウンに抱いている本質的なイメージが現われるような気がします。

こんなただの思いつき話をしていると変なものの見方をしているように思われますが、自分ではそんなつもりはなくて。ただ、特定の見方に縛られるのが好きじゃないので、ある視点だけで分析していると飽きてくるんです。そもそも世のなかで論議されるものって、基本的につまらないものばかりだなあ、と。そのつまらなさから逃げる方法はないかと、自分なりに変な視点、奇妙な表現を無理やりにでも考える。結果、それが人から見ると、何をやりたいのかよく分からない人に映るんでしょうね。

何もしなくても、違和感なく楽しく過ごせる方法はあるのか。

最近、気になっているのは、仕事をしなくとも、違和感なく楽しく過ごしていく方法はあるのか、ということ。結局、人間は何かしていないとアイデンティティを保てない。だから、金銭面で困らなくても、みんな何かし続けないと辛いんですよね。

人類の歴史を見ると、ほとんどの間、ひたすら生き続けるためだけに食べ物を得たり、掃除や洗濯をしたりと、四六時中、働き続けなければならなかったわけで。でも、もし何もしなくても生存できるなら、楽しく生き続けることができるのか。そう考えて、今はアメリカにいるとき、なるべく人と関わらず孤独に過ごすようにしています。数日人と会わないと身体がこわばって手が震えたりすることありますね（笑）。そのなかで何を感じるか、何をするとどんな変化が自分に生まれるかを実験している感じですかね。

仕事をせず、専業主婦でもないという状況で安定した自分を保つて意外に難しいこと。できている人をほぼ見たことがない。何かし続けなくとも、ごく自然にその場にいられる状態を何とか見つけたい。それが、今一番関心のあることです。

撮影場所：アダムアンドイブ

取材を終えて

取材に現われた成田さんは、散歩がてらにふらりと立ち寄ったような心地よい脱力感を携えていて、こんなふうには六本木の街にたたずんでいたのだらうと想像せずにはいられませんでした。その経歴からロジカルな回答が繰り出されると思いきや、データや歴史を交えながら、ご自身の視点というんなものが融合して生まれているであろう言葉。しかも、それは瞬間、瞬間に視点が移動していて、「こんな考えもある」「これも面白い」と次々違うボールが投げ込まれてくる感覚でした。スタッフ一同、ただただお話を伺う時間が楽しかった。この言葉にすべてが集約されていると思います。(text_akiko miyaura)